

第三十一回 船迫・堂がえり古墳

今から約一七〇〇〜一四〇〇年前、古墳と呼ばれるお墓が地域の有力者たちによって数多く築かれました。その頃はより大きな古墳を築くことが有力者たちのステータスシンボルになっており、そうしたことから古墳が盛んに築かれた時代を「古墳時代」と歴史上呼んでいます。

船迫窯跡公園にはこの古墳が四基良好な状態で残っており、遊歩道を散策しながら見学することができます。

古墳は花崗岩という巨大な石を積み上げて石室と呼ばれる部屋を造り、全体は土を円形に盛って仕上げます。造られた当時、古墳の横に開けられた羨門という入口から亡くなった人の遺体を搬入し、一番奥の玄室と呼ばれる部屋に安置します。遺体を安置した後、羨門部分を入頭大の石や土で埋めて石室入口を完全に閉鎖してしまいます。そして石室入口前に死者への供物を須恵器と呼ばれる硬質土器に入れてお供えしていました。ちなみにその家族が亡くなることを「追葬」といって、再び羨門を開いてその人の遺体を安置していました。現在の家族墓に通じるものがあります。

ところで日本創世の神話世界を描いた『古事記』には以下のような記述があります。イザナミノミ

コトが死に、黄泉国（よみのくに）死者の国）へと旅立った後、イザナミが恋しくてたまらないイザナギノミコトは黄泉国まで訪ねていきます。そして黄泉国で再会を果たす訳ですが、イザナミはイザナギに対して、しばらくの間、こちらを見ないでください。そうすれば一緒に現世に帰ることができま

すと答えます。しばらく待つイザナギでしたが、どうしてもイザナミの姿を一目見たくて約束を破りイザナミの姿を覗いてしまいました。その姿は体が腐り、色々なムシ達が這い回る想像を絶する姿でした。

その姿に驚いたイザナギは走って逃げ出します。自分の醜い姿を見られたイザナミは怒って追いかけてきます。そして黄泉比良坂（よもつひらさか）にたどり着いたイザナギは大岩で道を塞ぎ、イザナミに対して永遠の別れを告げたのです。

長々と日本神話を引用しましたが、実はこの神話は古墳と深い関わりがあります。船迫・堂がえり古墳で見られる横穴式石室古墳の遺体を安置する「玄室」が「黄泉国」。そしてイザナギが大岩で塞いでイザナミに永遠の別れを告げた黄泉比良坂が「羨門」。イザナギが必死に逃げた道が「羨道」と呼ばれる玄室に繋

がる道であると考えられています。「追葬」の際、神話で描かれたような情景を目にした人がいたのでしょう。こうした古墳での見聞や葬儀の様子が神話として実を結んだものと思われれます。古墳はその後も信仰の対象でした。船迫・堂がえり古墳の発掘調査では一号墳の墓前の調査で鎌倉時代頃の中国からの輸入陶磁器の破片が見つかっています。輸入陶磁器は当時大変高価な物でしたので、恐らく供物を載せてお供えされていたのでしよう。また、場所は異なりますが山本にある横穴墓（堂がえり古墳とほぼ同時代）のうち一基は「おかねさん」と呼ばれ、水の神様として今でも信仰の対象となっています。時代は流れても、人々の信仰は変わらないようです。

（文化財保護係 馬場克幸）



▲船迫・堂がえり古墳（2号墳）
手前に錯乱しているのが墓前の供物を載せた須恵器の破片。石畳の墓道を通り、羨門を抜けて石室内に入ります。

築上町ジュニアリーダークラブからのお知らせ

新生『築上町ジュニアリーダークラブ』として活動した25年度。3月に予定している児童館子どもフェスティバルとアンビシャスフェスタへの参画で締めくくります。

前身は町内の子ども会の卒業生であるOB・OGから発足し、築上町子ども会育成連絡協議会の指導者である本部役員から指導・助言をあおぎながら活動してきましたが、今年度より町の青少年事業の一環として、さらに広く地域のなかで活躍できるよう築上町教育委員会が直接支援しています。

それにより、現在25名のクラブ員たちは、町及び県主催事業にも関わることができ、積極的に自ら考え、行動し、発言することの難しさを学びながら、活動を通して築上町のリーダーとなるべく成長しています。

主な年間行事としては、定例会（2ヶ月に1回）、子ども会行事の運営支援（年に5回）、児童館子どもフェスティバル出店（春・夏）、町民文化祭の支援、研修会（春・夏）への参加、等々です。

築上町ジュニアリーダークラブは子ども会の卒業生だけでなく、町内在住の中学生・高校生なら誰でも入会できます。入会希望、また詳しいことを知りたい方はお問い合わせください。

問い合わせ
生涯学習課 社会教育係
(支所・内線263)

